



ルーマニア国立ラドゥ・スタンカ劇場

演出 シルヴィウ・ブルカレーテ

「オイディプス」「ガリバー旅行記」

OIDIP

変幻自在のプルカレーテ・マジック再び。

2年前『ルル』で衝撃を与えたルーマニアの鬼オプルカレーテの新作2本連続上演が実現!

「匂い立つような舞台」。当劇場の野田秀樹芸術監督は、ルーマニア演劇界の鬼オプルカレーテの演出作品の印象を、そう評したことがある。2013年『ルル』の来日公演で、本能の赴くままに生をむさぼる魔性の女ルル(オフェリア・ポビ)が躍動し、生々しいほどリアルで過激な空間が出現したことを思い出すと、あれはまさに、生気みなぎる「匂い立つ」舞台だったと納得できる。さらに、プルカレーテの演出には、作品ごとにまったく異なるアプローチを行う、という特質もある。今回は最新の2作品が連続上演されるので、その多様性に富むダイナミックな演出ぶりを、しっかり目にとめることができるはずだ。

人間の醜さのショーケース『ガリバー旅行記』

『ガリバー旅行記』は、エディンバラ国際フェスティバルの依頼を受け2012年に初演された、イマジネーション溢れる詩的な作品。美しい馬の登場とともに、おなじみの小人(第一篇)や大人(第二篇)ではなく、第四篇のフウィナム(馬の国)への航海第11章を作者のスイフト(=ガリバー)が読み出すと、気高く礼儀正しいフウィナム(馬)と共生する、野蛮極まりないヤファー(人間)の生態らしきものが、次々と戯画的に描かれる。出産した女性たちが新生児を売り渡し、その新生児がコックによって殺害、臓器を調理されてフウィナムに供されたり、同じロングコートとアタッシュケース姿の集団が現れ、統制の取れた画一的な行動に終始していたかと思うと、つかみ合いを始めて本性を露わにしたり……。シルエットや人形を使って大人や小人を彷彿させる場面もあるけれど、多くはスイフトの他の著作(エッセイや詩)を引用しながら展開する、悪夢のような人間の醜さのショーケースだ。『ガリバー旅行記』本編が、風

10月15日(木)~23日(金) プレイハウス

演出:シルヴィウ・ブルカレーテ

「ガリバー旅行記」
"ジョナサン・スイフト作「ガリバー旅行記」による"
出演:オフェリア・ポビ ほか 総勢18名

「オイディプス」
"ソポクレス作「オイディプス王」「コロノスのオイディプス」による"
出演:コンスタンティン・キリアック オフェリア・ポビ ほか 総勢14名

●ルーマニア語上演 日本語・英語字幕付
主催:東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)
東京都/アーツカウンシル東京(公益財団法人東京都歴史文化財団)

刺を超えた人間への憎悪で終わることを思えば、プルカレーテは、スイフトの真意を、見事にビジュアル化させている、と言っていいのかもしれない。

凄絶な宿命を背負う男の一生『オイディプス』

2014年初演の『オイディプス』は、ソポクレス作『オイディプス王』とその後日譚『コロノスのオイディプス』を合体し、「父を殺し母と交わる」宿命を背負った男の、壮絶な生涯を一気に見せる意欲作だ。オイディプスが、自ら両目をつぶした後コロノスにたどり着き、娘のアンティゴネとイスメネに介護される晩年から始まり、母とは知らずにイオカステと結婚してテーバイの国王となり、不吉な神託を受ける壮年時代へと遡ってゆく。このオイディプス夫妻の日常生活には、泥だらけのミイラのような、不気味な存在がつかまとう。疫病を可視化し、不穏さを増幅させる、プルカレーテらしい大胆な演出だ。最初は、映画のスクリーンのように横長で視界を狭めた舞台装置が、話が進むにつれて奥行きを広げ、ついにはオイディプスの死と世界の終焉を物語る壮大なパノラマになってゆく。ラドゥ・スタンカ劇場芸術監督のコンスタンティン・キリアックによるオイディプスは、共同体の長として宿命に立ち向かい、やがてすべてを甘受して神に近づいていく男を、頑強かつリアルに演じて説得力がある。

『ガリバー旅行記』と『オイディプス』。ともに従来のイメージとは一線を画し、キャストはほぼ同じなのに、まったく異なるスタイルで描かれた、プルカレーテの会心作。ラドゥ・スタンカ劇場の個性豊かな俳優たちの、変幻自在ぶりも楽しみだ。

文:伊達なつめ(演劇ジャーナリスト)

詳細はP9へ

寺山修司生誕80年 カントール生誕100年記念 カントールと演劇の二十世紀



写真提供: Change Performing Arts/Crioteka

ポーランドが生んだ世界的演出家の生誕100年記念企画。

この演出家の足跡を辿り、21世紀の演劇活動へと繋げていくために。

1979年、寺山修司は天井桟敷の機関誌「地下演劇」で、「物質、または死の演劇」というカントール特集を組み、「死の演劇宣言」を翻訳掲載するなどして、多くの人の関心をカントールに向けさせた。

それから数年後、日本を代表する世界的演出家鈴木忠志が芸術監督をつとめた利賀フェスティバルで上演された『死の教室』は、想像を絶するほどに衝撃的なものだった。

ロープで仕切られた空間の向こう側の薄暗がりで見られる光景は、古びて傷だらけになっている教室の机やボロボロの教科書の残骸などとともに、われわれを異質な空間へと誘うに充分であった。さらに登場人物たちは人形を抱えていたり、あるいは人形にしがみつかれたりしていて、不気味な様相を呈していた。カントールはそこを死の領域と名づけた。

「劇場は、川の渡り場のように、◀向こう岸▶からわれわれの生活へといたる足跡、◀移行▶を開示する場である。」

カントールはこのように書きつつ、『死の教室』を作っていた。だが、◀向こう岸▶からいったい何が送り届けられてくるのか、われわれはあのロープの向こう側に何を目撃しているのか。

この企画では、カントール作品の映像や写真、ドローイングなどを見つつ、シンポジウム、対談、レクチャーなどを重ねることによって議論を深め、カントールの活動の意味を、20世紀芸術の歴史のなかに位置づけ、考えていきたいと思う。

映像記録は、『死の教室』のほか『ヴィエロポーレ、ヴィエロポーレ』『くたばれ!芸術家』『愛と死の機械』『私は二度とここには戻らない』が上映される。

また、10月の会期中は、廃墟の写真家として知られる宮本隆司が『くたばれ!芸術家』の舞台稽古に密着した写真の特別コーナーも設置される。

シンポジウム「カントールの衝撃」には、カントールに深い関心を寄せてきた日本の二人の演出家、劇団解体社の清水信臣と庭劇団ペニノのタニノクロウ、そして、ポーランドからは、批評家・研究者のアンナ・R・ブジンスカ、元劇団Cricot²の俳優レフ・スタングレトが参加、文化的、歴史的差異なども視野に入れつつ、カントール演劇の魅力に迫る。

さらに、この企画の終章を飾るものとして、タニノクロウ作・演出によるワーク・イン・プログレス『タニノとドワーフ達によるカントールに捧げるオマージュ』の上演が予定されている。また元Cricot²の俳優リュトゥカ・リーバによるワークショップも企画されており、こうしてカントールの活動が多面的に紹介、議論されることになるだろう。

われわれは、いま、21世紀の演劇の方向性を見つめなければならない。そのために、戦争と革命の時代と言われる20世紀を生きた演出家の足跡を改めて辿り、そこに何らかの示唆を読み取る必要がある。カントールの作品群とともに歴史と記憶はどのように蘇ってくるのだろうか。

文:鴻 英良(演劇批評家)

10月8日(木)~10月18日(日) シアターイースト

作品上映 + 展示 + レクチャー + シンポジウム

■上映作品(いずれも日本語字幕付き) 詳細はP9へ
「死の教室」「くたばれ!芸術家」「ヴィエロポーレ、ヴィエロポーレ」「私は二度とここには戻らない」「愛と死の機械」

■レクチャー「カントールと演劇の二十世紀」10月10日(土) 16:15~
講師:鴻英良

■シンポジウム「カントールの衝撃」10月12日(月・祝) 16:15~
スピーカー=タニノクロウ+清水信臣+アンナ・R・ブジンスカ+レフ・スタングレト
司会=鴻英良

詳細はHPへ

12月17日(木)~24日(木) アトリエイースト

■タニノクロウ作・演出ワーク・イン・プログレス
「タニノとドワーフ達によるカントールに捧げるオマージュ」

12月18日(金)~20日(日) リハーサルルームL

■ワークショップ「カントールの舞台の俳優術」
講師:リュトゥカ・リーバ

主催:東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)
東京都/アーツカウンシル東京(公益財団法人東京都歴史文化財団)